

# いわて 復興 だより

がんばろう!岩手 つながろう!岩手  
第190号  
令和5年度第1号



## 三陸復興

平成23年3月11日に東日本大震災津波が発生しました。発災以来、国内外から多くの温かい励ましや御支援をいただいております。心から感謝申し上げ、この「つながり」を大切にし、復興のステージを更に前に進めていく岩手県の今を紹介します。

開催

### 第73回全国植樹祭いわて2023開催

岩手県・陸前高田市  
IWATE・RIKUZENTAKATA

令和5年6月4日(日)、「緑をつなごう 輝くイーハトーブの森から」を大会テーマに、天皇皇后両陛下ご臨席のもと、陸前高田市の高田松原津波復興祈念公園で、「第73回全国植樹祭」を開催しました。岩手県での開催は、昭和49年5月に八幡平市の岩手県県民の森で第25回全国植樹祭を開催して以来、49年ぶり2回目となり、陸前高田市の主会場と、盛岡市、北上市、久慈市のサテライト会場を合わせ、国内外から7,000人を超える方々にご参加いただきました。

式典前のプロローグでは、宮沢賢治の<sup>けんじゅう</sup>「虔十公園林」の朗読で、招待者を童話の世界に誘うとともに、東日本大震災津波からの復興の歩みを映像で紹介し、国内外からの復興支援に対する感謝と、震災の教訓を世代を超えて引き継いでいくことを誓う「感謝のメッセージリレー」が披露されました。

記念式典では、天皇陛下から、「震災を乗り越えて、この度、全国植樹祭が開催されることは誠に意義深く、復興に向けた地域の人々のこれまでのたゆみない努力と大会関係者の尽力に深く敬意を表します」とのおことばを賜りました。

天皇皇后両陛下のお手植え・お手播きでは、天皇陛下が南部アカマツ、カシワ、タブノキの苗木を、皇后陛下がベニヤマボウシ、ハナヒョウタンボク、ミチノクナシの苗木をお手植えされるとともに、天皇陛下はオオヤマザクラとケヤキの種を、皇后陛下はヤブツバキとハマナスの種をお手播きされました。

最後に、大会宣言として、「伐って、使って、植えて、育てる」という森林資源の循環利用を推進しながら、SDGsやカーボンニュートラルに果たす森林の役割を社会全体で共有し、森林・林業や木材産業に関する技術の研鑽に励み、みどり輝くふるさとの未来を切り拓いていくことを誓いました。

また、植樹祭前日の6月3日(土)、天皇皇后両陛下は、高田松原津波復興祈念公園国営追悼・祈念施設で供花されたほか、「奇跡の一本松」や東日本大震災津波伝承館などを視察されるとともに、地元で伝承活動に取り組む語り部等と懇談され、本県の復興の歩みに思いを寄せられました。

■問い合わせ 第73回全国植樹祭岩手県実行委員会事務局  
(岩手県農林水産部全国植樹祭推進室)  
☎019-629-5790



陸前高田市の主会場の様子



感謝のメッセージリレーの様子



天皇陛下によるお手植えの様子



東日本大震災津波伝承館を視察される天皇皇后両陛下

開発

## スマホアプリで震災伝承

大槌町  
OTSUCHI

ARアプリで再現された「観光船はまゆりが乗り上げた民宿」(写真提供:大槌町)

令和5年5月、大槌町は、東日本大震災津波で被災し、解体した旧役場庁舎と観光船が乗り上げた旧民宿をAR(拡張現実)技術で再現する「大槌町震災伝承ARアプリ」を開発しました。

アプリを入れたスマートフォンやタブレットを被災建築物の跡地にかざすと、画面内にCG(コンピューターグラフィックス)で再現した被災建築物がAR技術により浮かび上がる仕組みです。実際に見えている風景に重ねて写真を撮影できるほか、押し寄せた津波の高さを表示したりすることができます。さらに、スマートフォンから取得する位置情報などを用い、被災建築物の外観を正面だけでなく360度、様々な角度から見ることもできます。

町では、二度とこのような悲惨な被害に見舞われないようにと願い、震災津波を決して忘れず後世に伝え続けていくことを目的に本アプリを開発し、今後の震災伝承や防災教育などで活用することとしています。

■問い合わせ 大槌町協働地域づくり推進課

☎0193-42-8718

大槌町震災伝承ARアプリはこちら↑



伝承

震災の教訓を  
海外からの研修生へ伝承釜石市  
KAMAISHI

令和5年6月21日(水)、アジア各国の研修生が釜石市の防災学習施設「いのちをつなぐ未来館」を訪れ、東日本大震災津波の事実・教訓や津波からの避難について学びました。

当日訪れたのは、アジアの将来を担うリーダーの育成に取り組む三重県の「IATSS(イアツ)フォーラム」の研修生で、インドネシアやフィリピンなど10か国の約20人が、震災の教訓を学ぶワークショップや震災当日、鶴住居小学校・釜石東中学校の児童生徒が避難した1.6kmのルートを実際に歩き、当時の状況を追体験しました。

参加者は、「ふだんから家族や地域の人と災害について話し合い、事前に備えておくことの大切さを学んだ。母国に帰ったら、災害から身を守ることの大切さを伝えたい」と話していました。

■問い合わせ 株式会社かまいしDMC

☎0193-27-5666 (いのちをつなぐ未来館)



津波から避難したルートを追体験する海外からの研修生  
(写真提供:株式会社かまいしDMC)

## 世界へ、未来へ いわてTSUNAMIメモリアル

東日本大震災津波の事実と教訓を伝える施設「東日本大震災津波伝承館」(いわてTSUNAMI(つなみ)メモリアル)を紹介します。

東日本大震災津波伝承館では、令和5年6月17日(土)から7月17日(月・祝)まで、令和5年度第1回企画展示「つなみ対策の歩み～昭和三陸地震津波からの90年～」を開催しました。

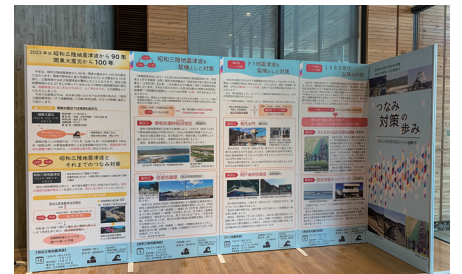
今回の企画展示では、三陸地域における津波対策の歩みについて、「昭和三陸地震津波(1933年)」「チリ地震津波(1960年)」「1980年代以降」の3つの時期に着目し、自助・共助に加え、高地移転・防潮堤の整備など公助による対策、防潮堤・水門などハード対策の強化、ハザードマップの作成やそれを活用した避難訓練・防災学習などのソフト対策の進展による総合的な津波対策、そして東日本大震災津波を経て、より強化される総合的な津波対策のあり方について紹介しました。

期間中には、楽しく防災を学ぶイベント「学ぶをまなぶ、伝承館。」を開催し、参加者は、紙芝居の読み聞かせ、避難所で使える新聞紙スリッパづくり、防災ゲームやクイズを通じて、防災意識を高めました。

東日本大震災津波伝承館では、今後も様々な企画展示や関連イベントを通じて、東日本大震災津波の事実と教訓を多くの方々々と共有しながら、自然災害に強い社会を一緒に実現することを目指します。

■問い合わせ 東日本大震災津波伝承館

☎0192-47-4455



企画展示の様子



企画展示関連イベントの様子

開催

## 令和5年度第1回いわて復興未来塾開催

宮古市  
MIYAKO

令和5年7月9日(日)、「新しい三陸の創造 ～人・モノ・コトの交流～」をテーマに、令和5年度「第1回いわて復興未来塾」(併催：いわて三陸復興フォーラム(沿岸報告会)・「いわての復興を自治の進化に」第10回シンポジウム)が、宮古市で開催されました。

午前のエクスカージョンでは、田老防潮堤と津波遺構「たろう観光ホテル」の視察が行われ、50名が参加しました。参加者は、一般社団法人宮古観光文化交流協会の学ぶ防災ガイド・元田久美子さんと澤田強さんの案内により、防潮堤に上って東日本大震災津波発災時の田老地区の状況や復興の取組について説明を受けた後、津波遺構「たろう観光ホテル」の館内で津波のビデオを視聴しました。この津波のビデオは、震災当日にホテル6階から撮影された津波が押し寄せてくる映像で、参加者は、この場所で見ることができない映像を見ながら、津波の高さと威力を実感していました。



津波遺構「たろう観光ホテル」を見学する参加者

午後は、宮古市地域創生センター(うみマチひろば)を会場に、事例報告が行われ、約70名が参加しました。

NPO法人みやっこベースの理事長・早川輝さんは、高校生の地域活動支援や若者向けフリースペースの設置、子どもが様々な社会体験を行う子どものまち「みやっこタウン」の実施など、若者が主体的に社会参画できる地域社会を目指した取組を紹介しました。

NPO法人体験村・たのはたネットワークの理事長・楠田拓郎さんは、全国でもいち早く取り組んだ、地元漁

師が操るサップ船(小型の磯船)に観光客が乗り込み、北山崎をクルージングするサップ船アドベンチャーのほか、東日本大震災津波後の新たなツーリズムとして震災の体験や教訓を伝承する「大津波語り部」の取組などを紹介しました。

令和5年3月まで岩手県商工労働観光部産業経済交流課でセールスディレクターを務められた、日本航空株式会社鹿児島支店の副支店長・佐々木邦晃さんは、復興道路等の全線開通を県産品の販路拡大につなげるために発案した、航空物流を活用した「高鮮度物流事業」を紹介しました。これは、朝に水揚げしたホタテや真ダラなどの鮮魚等を花巻空港まで輸送し、そこから直行便で伊丹空港まで空輸するもので、岩手県沿岸の海の幸が伊丹空港や大阪方面の百貨店で高い評価を受けていることを報告しました。

知事からは、「復興から更に、震災前よりもすごいこと、震災前にはできなかったようなことをやっていく時期に入っており、力強さを感じている。県としてそれを応援したい」とコメントがありました。

事例報告の様子は、動画配信サイトに掲載していますので、是非ご覧ください。➔



事例報告後の記念撮影の様子

■問い合わせ 岩手県復興防災部復興推進課  
☎019-629-6945

開催

## 三陸復興防災会議2023開催

宮古市  
MIYAKO

令和5年7月10日(月)、岩手県は、「いわて県民計画(2019~2028)」第2期アクションプラン「復興推進プラン」の着実な推進に向け、「新しい三陸の創造～復興の『今』と復興の『未来』～」をテーマに、県と沿岸市町村のトップが一堂に会する「三陸復興防災会議2023」を宮古市で開催しました。

会議では、株式会社日本総合研究所の主席研究員・漢谷浩介さんによる基調講演のほか、県と沿岸市町村から、復興における課題と今後の取組について報告され、被災者のこころのケアやコミュニティへの支援、震災の教訓の伝承・発信などが今後の課題として挙げられました。

知事からは、「今後、更に地元の底力と、県外、海外と育んだつながりの力を生かし、岩手沿岸が全国や世界から高く評価される地域として発展していくようにしていきましょう」とコメントがありました。

会議の様子は、動画配信サイトに掲載していますので、是非ご覧ください。➔



■問い合わせ 岩手県復興防災部復興推進課  
☎019-629-6935



会議に参加した知事と沿岸市町村長等の記念撮影の様子



## 道の駅「やまだ」

魅力が詰まった  
にぎわいの新拠点



twitter



Instagram

道の駅「やまだ」では、twitter、Instagramで情報発信しています。

平成11年にオープンした道の駅「やまだ」が、令和5年7月、三陸沿岸道路山田IC付近に移転し、リニューアルオープンしました。

新しい道の駅「やまだ」の愛称は「おいすた」で、山田町の特産品である牡蠣(=oyster、「オイスター」と、「おいでよ」)に由来しています。

新しい道の駅は、トイレのほか観光情報や道路情報を提供する「道路休憩施設」と、産直施設や飲食コーナーを備える「地域振興施設」の2棟構造となっており、地域振興施設には、観光客だけでなく町民も日常的に利用できるよう、町産の新鮮な野菜や海産物などを豊富に取り扱う産直店舗や、地元食材を活かした寿司等を提供するレストランのほか、創業初期の若者を応援する「チャレンジショップ」を設置しています。また、建物に隣接する公園には、子どもがはねて遊ぶことができる「ふわふわドーム」が設置され、憩いの場として子どもから大人まで幅広い年齢層が利用できます。

誘客の仕掛けに富む新たな観光拠点・情報発信の拠点として、道路利用者の利便性の向上とともに、町内経済への波及効果が期待されています。

**場所** 岩手県下閉伊郡山田町山田第5地割66-1  
**問い合わせ** 道の駅「やまだ」 ☎0193-65-6631 又は  
 山田町水産商工課 ☎0193-82-3111 (代表)



道の駅「やまだ」(写真提供:山田町)



# いわてさんりくびと

連載「いわてさんりくびと」では、被災地・三陸の復興に向け、熱い想いをもち、活躍する方々を紹介します。第136回は**大林 孝典**さんをご紹介します



～循環型のまちづくりで地域を元気に！～

**PROFILE** —茨城県出身。東京の大学を卒業後、独立行政法人国際協力機構(JICA)でさまざまな課題解決に取り組んだほか、アフリカの駐在員も経験。2015年に陸前高田市へ移住して、市職員として観光や国際交流などの業務を担当した。現在は2つの法人に所属し、これまでの多彩な経験を生かして活動している。

### 第2のふるさとへの移住

大林さんが初めて陸前高田市を訪れたのは、アカペラサークルに所属していた大学時代でした。学校や福祉施設などで歌声を披露するうちに、いつの間にか“第2のふるさと”になっていたそうです。東日本大震災津波では、発災から2か月後の同市でボランティア活動も行いました。

そんな大林さんが陸前高田市に移住したのは、2015年のことです。独立行政法人国際協力機構(JICA)での海外勤務を経験し、「任期という制限なく、一つの場所で納得いくまで活動したい」と考えたのがきっかけでした。大林さんは当時のことを、「震災で被災した街を見ているからこそ、移住することに迷いはありませんでした」と、振り返ります。

### 新たな産業を生み発展を目指す

移住後、大林さんは市職員を経て、現在は一般社団法人ピーカン農業未来研究所と陸前高田しみんエネルギー株式会社に所属しています。陸前高田市は東京大学と連携し、ピーカンナッツを新たな産業につなげる取組を行っており、同研究所が試験栽培を進めています。

2019年に設立した陸前高田しみんエネルギーでは、市内で生産した再生可能エネルギーを含む電力を供給し、収益を地域貢献に充てています。同市には街で暮らす「市民」と、復興に関わった「街を思う民＝思民(しみん)」の言葉があり、同社では両方を大切にすべく社名にひらがなの「しみん」を使用しているそうです。

大林さんは「再生可能エネルギーの生産拠点を増やし、安定供給につなげたい」と語ってくれました。

### 岩手県の被害状況

令和5年6月30日現在

- 人的被害 死者：5,145人(余震、震災関連死を含む)  
行方不明者：1,110人
- 建物被害(住家のみ、全半壊)26,079棟  
被害状況等の詳細／義援金・寄附金の募集等

いわて防災情報ポータル

検索

### 皆様のご支援、ありがとうございます

令和5年6月30日現在

- 義援金受付状況 約188億5,077万円(99,201件)
  - 寄附金受付状況 約205億8,516万円(18,526件)
  - いわての学び希望基金(※)受付状況 約106億5,487万円(27,631件)
- ※被災した子どもたちが勉強やスポーツ等に励めるよう「くらし」「まなび」の支援に使われます。



## いわて震災津波アーカイブ～希望～

約24万点の資料を検索・閲覧できます。

いわて震災津波アーカイブ

検索



いわて復興だより 第190号

令和5年8月1日発行 企画・発行／岩手県復興防災部復興推進課 ☎019-629-6945 編集・校正／永代印刷株式会社